

# 逆修信仰の史的研究

川 勝 政 太 郎

## 一、序 言

長年にわたって仏教信仰遺品の調査、研究に従って来た私は、それらの遺品の銘文中に、逆修という言葉を使用した例を、いろいろ見て来た。時代的には中世から近世にわたり、遺品の種類にあつては多くは石造塔婆のたぐいに見られる。つまり私どもの祖先の信仰の中に、逆修を目的とする石造塔婆が多かつたということである。

この逆修とはいかなることを指すのかは、仏教辞典をはじめ仏教関係の書物に記載されているが、多くは「逆<sup>あらか</sup>じめ、自分の死後の仏事を生存中に修すること。また豫修ともいう。」と解説し、この事の根拠となつた経典について触れているのが一般的であり、余り長い詳しい記載をしたものはない。

その中であつて、服部清道博士が早くその大著『板碑概説』（昭和八・九）の第二篇第四章第三節「逆修と板碑」に説かれたものは、最も詳しい内容を持つものである。しかし実例の対象を板碑に限つたものであるので、他の石造塔婆において、逆修がどのようにあらわれているかについては、触れられていない。

板碑と逆修との関係については、とくに近年来関東の板碑の徹底的総合調査研究を進められつつある東京学芸大名誉教授千々和実氏『武蔵国板碑集録、旧比企郡』（昭和四三・四）の「旧比企郡内板碑の概観」中に、逆修板碑の多いことを数字を以て示し、板碑を主として死者のために造立されたものと考えてしまうことは誤りで、むしろ生存者が自身の救済のために造立することが主であつたとする見解を強調されている。

## 逆修信仰の史的研究

それにしても、逆修ということが、長い年月にわたって行なわれ、歴史上の事実であることからすれば、時代的にも、地域的にも広く資料を集めて、逆修という信仰形態を歴史として研究してみることが必要である。万全を期することはできぬが、とりあえず手もとの資料を整理して、逆修信仰の史的研究の基礎になるようなものを書いてみようとするのが、この小論の目的である。博雅の御示教や御叱正を得て、将来の訂正を期したいと思う。

### 一、逆修とその目的

逆修とはどういう信仰であるか、その目的は何であるかということについて、一般に説かれることを中心にして通説しておく。

逆修の読み方はいろいろ行なわれている。「ぎゃくしゅ」「ぎゃくしゅう」「ぎゃくじゅ」があり、どれが正しいというのではないのである。この逆は「あらかじめ」の意で、自分のために生存中に、あらかじめ自身の死後の法事を修することを指す。逆を順逆の逆の意にとって、たとえば親が子よりもおくれ、先に死んだ子のために法事を行なうような時に、逆縁による法事の意で逆修とする考え方があがるが、私の今まで調べた例ではそのようなものはなく、すべて「あらかじめ」の方である。従って「豫修」というのと同じである。

しかし、時には生存者が自身のためというのではなく、その子が現在生存する親のために、妻が健在の夫のために、逆修を営むこともあった。こうしたことは遺品の調査によって浮かび上がってくることで、一般的な書物には記されていない。

次に死後の法事を何故に、自身で生前に修する必要、または希望があるかということである。この逆修の本説については、服部博士の前掲書に説かれた通りである。

『灌頂随願往生十方浄土経』第十一に説くところを、理解の便のため読み下してみる。

普広菩薩、後に仏にもうしていわく、もし四輩男女、よく法戒を解し、身の如幻を知り、精励修習し、菩提の道を行じ、未だ終らざるの時、逆じめ三七を修し、燈を燃じ明を続け、繒の幡蓋を懸け、衆僧を請召して、尊経を転読し、諸の福業を修せば、福を得ること多きにあらざりと。仏言いたもう。普広よ。その福は無量にして度量すべからず。心の所願に随って、その果実を獲ん。

この「逆じめ三七を修し」ということが逆修三七日（二十一日）で、その法事によって無量の福を受けるというのである。

法然上人の著作と称する『逆修説法』には、その功德をくわしく述べる。これも読み下して掲げる。

然れば則ち今この逆修七七日（四十九日）間、供仏・施僧の営みは、即ちこれ寿命長遠の業なり。たとい、その業因を修せずして、かの国（安楽国、極楽）に生るを得るとも、仏願によって無量の寿を得ん。なんぞいわんや、かくの如く別にその業因を修するにおいておや。寿命の功德ほば述ぶること、かくの如し。

また弘法大師の撰にかかるという『逆修日記事』というものがあり、室町時代の偽作と考えられているが、これらによって逆修の思想が世に行なわれた根拠をうかがうことができる。

これらを見ると、逆修の功德は現世において、計るべからざる福を得ると説かれ、それが発展して計るべからざる寿命を得ると解釈されている。人間の福・寿に対する執着が、こうした考え方に引きつけられることは当然であり、また人間の歴史の上からも興味あることである。福も寿も不用だという人間は、尊敬すべき人間のように見えるが、それは人間の本質ではない。やはり本質的な人間によって、人間の歴史は進められるのである。

死者のために、他の者が善事を行なうのが追善である。逆修はその反対で、自身が自分のために生存中に善事を行なうのである。つまり死者の受ける追善と、他の者が善事を行なって受ける功德を、二つながら自分が行ない自分が受けるのである。この功德、すなわち善行によって受ける福利について、前記の『灌頂随願往生十方淨土經』中に、普広菩薩が仏に対して、この世で仏教を信じなかった者が死んでから、親しい人たちが、彼のために追善を行なった時、彼は福を得ることができるか、どうかを問うた時に答えた言葉を、次に読み下してみる。

仏言いたもう。普広よ。この人のために福を修せば、七分の中、一を獲得となす。何のゆえにしかるか。その前世に道德を信ぜざるによってのゆえに、福德七分して一を獲得しむ。

追善の福は七分して、死者は一分を得、余の六分はことごとく追善を行なった人に属するといふのである。

従って自身生存中に自分のために逆修を行なえば、死者の受ける一分、追善者の受ける六分、全部を自分が受けることになる。これを「七分全得」といふ。逆修を行なう者は七分全得というわけである。そのために人々は逆修を行なったといえ、人間の欲の深さにあきれるという人もあるかも知れぬが、これはもう少し善意に解釈して、七分全得を望むほどに、仏教の功德を尊重したものと解すべきであらう。

知恩院蔵『法然上人行状絵図』第二十三巻の詞書に、ある人が往生の用心を法然上人に尋ねたのに対する返事の一条に、

一、七分全得の事、仰のままに申げに候、さてこそ逆修はすることにて候へ。さ候へば、後の世をとぶらひぬるべき人の候はん人も、それをたのまずして、われとはげみて念仏申て、いそぎ極楽へまいりて、五通三明をさとりて、六通四生の衆生を利益し、父母師長の生所をたづねて、心のままにむかへとらんと思ふべきにて候也。(下略)

とあって、後世を弔ってくれる人が存在しても、それをあてにしないで、自分で逆修を行ない、七分全得の功德を受けるがよいとしている。

逆修とその目的について以上の如く理解されるが、これらが歴史的にどのように展開するのであろうか。このような観点からのまとめた論考を、寡聞にして知るところがないので、貧弱な手許の資料によって、一応のまとめを行なうことにしたい。

### 三、文献に見る平安時代後期の逆修

逆修が、中国や朝鮮でわが国より前に、どのように行なわれていたかということについては、それぞれの専門の方々から教えて頂くことにして、わが国の逆修がいつから行なわれていたかを見ることからはじめたいと思う。

平安時代中ごろ、関白の藤原道隆が東三条第において修したが、わが国における最も古い逆修の仏事であったとして知られている。『百鍊抄』第四、正暦五年(九九四)十月二日の条に

関白於東三条行逆修仏事。造<sub>ニ</sub>図絵木等<sub>一</sub>佛像。書<sub>ニ</sub>写金泥法華經十一部<sub>一</sub>。十僧<sub>八口僧綱</sub>。外六十僧。(下略)  
と見え、『日本紀略』後篇九、同日の条にも

関白於東三条院行逆修法会。公家有御誦經使。藏人左近少将源明理也。  
と記載されている。この関白藤原道隆の逆修は、貴族の福と寿の祈りの性質を持つもののように思われる。

『日本記略』後篇十一、寛弘五年(一〇〇八)八月十四日の条に

皮聖人(行円)於行願寺。自今日<sub>ニ</sub>至<sub>ニ</sub>十月三日<sub>一</sub>。始<sub>ニ</sub>四十八講<sub>一</sub>。擬<sub>ニ</sub>弥陀四十八願<sub>一</sub>也。為<sub>ニ</sub>法界衆生逆修<sub>一</sub>也。

とあるのは、京都一条にあった行願寺(革堂、後に寺町竹屋町に移る)において、鹿の皮衣を着て市中を教化して歩いたので皮聖人とよばれた

行円が、広く諸人の逆修のために、阿弥陀信仰の四十八講を行なったものである。日数も四十八日にわたるもので、これは貴族の法事でないところに意義があるが、貴族でない諸民と逆修との結びつきは、このような大衆的な場によって成り立ったのであろう。貴族の独力による逆修の法事とはちがうのである。後世に至っても、富裕層の人は別として、庶民が集団で逆修を行なうという形態の源は、この皮聖人の法界衆生逆修のようなものにあるのであろう。

源経頼の日記『左経記』万寿三年（一〇二六）四月三日の条に

今日禅殿被修逆修法事、圖書等身阿弥陀仏六十一体御年六十一、仍宛毎年一体也

又阿弥陀経宛一月十二卷、同被書写供養也

と見えるのは、法成寺の御堂で藤原道長が修した逆修である。六十一歳であったので、阿弥陀仏の仏画六十一体を造立した上、阿弥陀経を月一卷ずつにあてて書写供養した。もちろん、貴族中の貴族であった道長の弥陀信仰と、福寿祈願の逆修であったが、それより一年八か月後に六十歳で没した。

源俊房の日記『水左記』承保四年（一〇七七）七月二十二日の条に

已剋許参高倉殿、自明日可有五十日御読経、是逆修御善根也

とあるのは、故宇治関白藤原頼通の室の逆修であって、翌二十三日の条を見ると、高倉殿の西の対の南面での法事が行なわれ、四面に幡、華鬘などを懸け、三尺皆金色の阿弥陀三尊像を螺鈿入りの仏壇上に奉安し、前には花を立て、前机に仏器や仏供を置き、妙法蓮華経一部八巻に開結の二経をそえ、阿弥陀経、転女成仏経、般若心経各一卷を備えた。これらの経の軸は水晶、表紙の文字は金泥書で、蒔絵の経箱に納められた。前机、磬台などもすべて螺鈿入りである。請僧は十人、講師一人、午後六時ごろからはじまって日没ごろに終わった。夏のことであるから七時半ごろであろう。いかにも藤原時代らしい優美典麗の法事が目の前に浮かぶ。

七月二十九日が御逆修一七日。それより七日、七日を経て九月十三日の条には「今日高倉殿逆修御法事五十日畢也」と書き出して、くわしい記述がある。午後二時ごろから侍廊において御膳が出され、終って読経、講筵が日没まであり、また御念仏があつて後、僧たちに布施があり、夜に入つて終了。今日まで高倉殿の内に宿住していた僧たちも、今夜皆分散したのである。この逆修が五十日にわたる法事であったこと、その貴族的な法事の有様がよくわかる点で、貴重な資料である。

# 逆修信仰の史的研究

源師時の日記『長秋記』保延元年（一一三五）二月五日の条に、三井寺の前大僧正行尊の入寂のことを聞き、過日見舞った時に行尊が師時に話したことを三つ記す中に、

又語云、余此六七年間、修逆修善<sup>日</sup>及二千日、其間毎日一部供養法花、外題自筆書之、以此功德可往生極樂之由、不動尊祈念<sup>日</sup>（下略）とあって、行尊はこの六、七年の間、逆修二千日に及び、毎日法華經一部を供養し、その經の外題はみずから書いて来た。この功德によって往生極樂がかなえられるように、三井寺の信仰の中心たる黄不動尊に祈念したのである。二千日というような逆修の仕方のあること、逆修の目的が極樂往生の信仰そのものであることを述べている点に注目される。

藤原宗忠の日記『中右記』長承三年（一一三四）十二月十五日の条に

從今日行逆修善根<sup>七ヶ日</sup>

例時僧五口、給裝束一具

今日等身木像阿弥陀仏一体、自筆法花經一部（下略）

と見え、同二十一日まで毎日日本尊を変えて法事を行なっている。毎日の僧は五人で、他に講師一人である。同じ貴族でも前述の高倉殿の場合に比べると小規模である。

宗忠の逆修法事は七七日（四十九日）にわたるものでなく、七日間であるが、後述の例にあるように、この各一日を七日にあてているものと思う。すなわち

十二月十五日	初七日	阿弥陀仏木像
十六日	二七日	迎接曼陀羅
十七日	三七日	弥勒繪像
十八日	四七日	如意輪觀音繪像
十九日	五七日	地藏菩薩繪像
二十日	六七日	虚空藏菩薩繪像

二十一日 七七日 釈迦三尊絵像

となっている。この忌日と本尊との関係はこの時代では、まだ一定したものではなく、その人の信仰によって選ばれているものと思うが、広く親しまれている仏菩薩ばかりであり、はじめに阿弥陀を置き、終りに釈迦を据えたのは、一つの考え方であろう。最終日の日記の記述に「逆修之結願也……今生之大願無事障遂了、生中之大慶也」と非常な喜びを示している。それほどに古人の逆修に対する気持が「今生の大願」とか「生中の大慶」とかいう表現になっているのである。

平信範の日記『兵範記』に、鳥羽上皇の女院高陽院泰子の、仁平二年（一一五二）十二月六日から十二日までの七日間を、初七日から七七日にあてて行なわれた御逆修のくわしい記述がある。これは白川御所の寝殿において修せられ、前記の高倉殿と同様に華麗な法事であるが、その事実を示すにとどめて、省略に従う。

さらに『兵範記』には、嘉応元年（一一六九）六月十七日、後白河法皇御遁世の日から始められた御逆修についての記事がある。この時は、七日目毎に行なわれ、七七日の翌日の五十日を結願日とされ、現在の洛東三十三間堂に近い法住寺御所の御懺法堂で営まれたのである。法皇の御逆修であるから大規模であったこというまでもない。

藤原経房の日記『吉記』には、寿永二年（一一八三）二月九日から長講堂で行なわれた後白河法皇の御逆修の記事があり、日記に欠落があるが、五十日を結願日とされたものである。さらに元暦元年（一一八四）十一月十九日から三日間を限って、法住寺御所寝殿において行なわれた後白河法皇の御逆修の記事が見られる。このように同一人が何度も逆修を行なう場合は、どのような理由があるのだろうか。

以上、日記を資料として平安後期の逆修を瞥見した。この時代の逆修の事実を金石文に求めてみたが、一例も見出すことができなかった。この事はこの時代の個人的な逆修は上流階級の間に行なわれたのが本体であって、中級の人たちの間にまで及んでいないものと考えざるを得ないのである。

ところが次の鎌倉時代に入ると、様相が変わって、多くは石塔に刻まれた銘文により、その時代の逆修の歴史を見ることができるようになる。

#### 四、鎌倉時代の逆修供養塔など

香川県高松市一宮町の大宝院は、田村大明神の神宮寺であったが、境内に鎌倉時代中期前後の古石塔の残欠が数基残存している。この地方の古石塔はほとんどすべて角礫質凝灰岩であり、風化が早い。ここに取り上げるのは、本堂前の土壇上に立つ三基の石塔中の向って左端のもので、寄せ集めの状態だが、高さ四八センチ、直径七〇センチの球形の塔身に、石の剥離で文字を所々失った刻銘があり、

奉……

……六十万部内

奉納

田村大社二十八万部

……開結経逆修名帳

……己酉 二月廿九日

大願主

と辛うじて読んだ。他の塔に宝治元年（一二四七）の刻銘があることから推して、この干支の「己酉」は建長元年（一二四九）己酉の年にあてたい。

この鎌倉中期の石塔に刻まれた内容は、田村大社に二十八万部という経が納められたことであるが、この多数がどのような形式をとったものであるかはわからない。開結経とあるから、これは法華經一部八巻に開経、結経を加えた十巻を示すものである。それよりも私の目を引くのは「逆修名帳」というものである。他の例でいうと、時宗の遊行聖が六十万入決定往生の札を諸人に与え、結縁のしるしとして「名帳」にその人の名を記入するということがあった。逆修名帳は前記の皮聖人が行なったような大衆のための法界逆修が修せられ、それに結縁した人たちの名を記入し、その名帳を田村大明神に奉納したのではなかったであろうか。

大宝院に所蔵される室町時代の懸仏二面（一面は文明九年在銘）には、聖観音像があらわされる。これが田村大明神の本地仏を示すのであ



る。聖観音を本地とする田村大明神に、逆修善根の法事を修したことの保証をして頂こうというのが、逆修名帳の奉納であつたのであろう。こう考えることができれば、ここに鎌倉中期の多くの庶民たちと逆修の関係を想定することになるのである。

福島県郡山市安積町成田の民家横に立つ弥陀種字板碑には、両端に各一行として

右逆修者為□阿弥陀仏成仏

弘安六年癸未二月十五日□阿□

の刻銘がある。二行とも名のところが判読できないので推定になるが、これは同一人の名が一方は何阿弥陀仏で書かれ、一方は略して何阿または何阿弥のように刻まれているのであろう。弘安六年（一二八三）であるから、鎌倉時代の石塔に逆修の文字の見える古いものの一つであろう。

山形県南陽市赤湯町東正寺のそばの街道上方の山腹に、磨崖板碑が大きい岩に二段に彫出されている。珍しい景観である。永仁二年（一二九四）の年号を刻むもののあるのが上段の五基で、向って右の三基は梵字を弥陀三尊として、亡父のため、亡母のため、さらに一基は自身の逆修のために造立した。左の二基では、右のが弥陀の種字で亡父のため、左のが勢至の種字で自身の逆修であることが、磨滅のはなはだしい刻字からも、うかがうことができる。両親の菩提をとむらう造塔と、自身の逆修の造塔とを別々に、同時に行なっているのである。この時代にこの場所に個人的な磨崖板碑を造ることのできたのは、土地の富裕階級の人と考えねばなるまい。

東京都青梅市塩船の観音寺阿弥陀堂背後の丘上に立つ板碑は、上半を欠損しながらも高さ一八〇センチの大型のもので、失なわれた梵字は弥陀の種字と知られる痕跡がある。

願以此功德

奉造立一百余人

普及於一切

永仁二年丙申九月十四日大勸進成円

我等与衆生

皆共成仏道

逆修卒都婆也

成円という僧が大勸進となつて、一百余人の多数の人々の逆修を行なつた時の供養塔婆で、永仁四年（一二九六）に造立された。この武蔵野

逆修信仰の史的研究

## 逆修信仰の史的研究

の中世の村人たち百余人の息吹きを感じる思いがする。

福島県須賀川市芦田塚の国立療養所構内の東端丘陵上に立つ双式弥陀三尊供養碑は、高さ一四一・五センチの方形に近いもので、二組の弥陀三尊像の薄肉彫は、きわめて優秀である。二行にわたって次の刻銘がある。

□比丘尼逆修菩提願以此功德普及於一切我等与衆生皆共成仏道

嘉元三年□九月廿五日相当三十五日敬白

これは死者のための造立のように見える銘文であるが、某比丘尼が自身の逆修菩提のために造立したものと私は解する。

注意を要するのは、鎌倉時代以降に多数にあらわれる逆修供養の石塔について、石塔を造立することが逆修のように誤解される心配のあることである。逆修の法事を修することが逆修の本体であって、その法事の過程中に、あるいは法事の終わった時などに供養のために石塔を造立したのである。

いまこの供養碑についていうと、某比丘尼は嘉元三年（一三〇五）の秋に逆修法事を営み、その五七日（三十五日）に相当する九月二十五日に、この供養碑を造立したということになる。なお、これだけの立派な供養碑に要する費用の大きさから見て、これを一人の負担で造立した女性の性は、土地の富裕層の在俗出家者と考えられる。

福島市飯坂町平野の医王寺の正和二年（一三二三）在銘の長方形自然石の板碑は、高さ一〇九センチで余り大きいものではない。刻銘は

右造立趣者為悲母逆修

正和二年 癸丑  
十月十旬日

善業兼法界群萌等正覚故也

とあって、これは子が現在の母のための逆修を行なったものである。子の母に対する孝養の情が手にとる如く感じられるが、この場合、七分全得はどうなるのであろうか。悲母は一分しか福を得られないのだろうか。おそらくそういうことは超越しての孝養にちがいない。

静岡県沼津市上香貫の靈山寺墓地にある五輪・宝篋印混合式石塔は、高さ一六二センチ、球形の塔身には像容四方仏を刻出した立派な石塔である。その反花座の側面に次の四行の刻銘を、先年私は発見した。

右志為逆修」沙弥観□」正和三年二月□□□所造建也」

正和三年（一三一四）に、沙弥観□が自身個人の逆修供養塔として造立したもので、これほどの本格的石塔を個人で造立し得たこの人は、沙弥を称しているが職能的僧侶でなく、中世の上級武士層または名主層の人と見られるのである。このことに関しては拙稿「中世における石塔造立階級の研究」（大手前女子大学論集第四号、昭和四五・一一）に述べた。

奈良県生駒市上の長弓寺山内の宝光院に安置する像高八〇センチ、桧材の寄木造、玉眼入り、彩色像の地藏菩薩立像には、頭部内面に次の墨書銘がある。

正和四年 南都 大仏師  
三月日 法橋康俊  
中御門逆修 少仏師康成  
御仏也

正和四年（一三一五）に鎌倉末期から南北朝時代にかけて活躍した奈良の大仏師康俊と康成の父子の作品である。「中御門の逆修の御仏」とあるのは、どういう意味であろうか。中御門は奈良の町の中の地名だが、その他に逆修者の名が記されていないのは、大仏師康俊自身が中御門に居住し、自分の逆修仏として造立した地藏尊であったのかも知れない。その当否は別としても、鎌倉時代末の逆修の本尊となった木像の一例が知られることは、注目すべきである。

埼玉県北足立郡新座町片山の法台寺境内に、鎌倉末から南北朝に及ぶ板碑九基が並立するのは壯観である。その中に高さ一四五センチ、塔身上方に天蓋と弥陀三尊種字を彫刻した同じ形式の板碑二基が隣合って立っている。下半に梵文の光明真言を刻み、銘文も同形式になっている。

(一)	沙弥	(二)	藤原
	道阿		氏女
元亨二年十月日	壬戌	元亨二年十月日	壬戌
為逆		為逆	
修也		修也	

逆修信仰の史的研究

逆修信仰の史的研究

この二基は元亨二年（一三二二）十月、沙弥道阿と藤原氏女の夫妻が、自身の逆修供養塔として造立したもので、このような夫妻同時の逆修塔の例はしばしばある。道阿夫妻が富裕層の人であることは、くり返し述べたところである。

埼玉県行田市野の元亨四年（一三二四）の梵文真言を多く刻んだ板碑は、いま折断しているが総高一六六センチのもので、その銘文は

右奉造立

意趣者為

僧良弁逆

元亨<sup>二</sup>甲<sup>一</sup>  
子<sup>二</sup>八月時正

修善根乃

至法界平

等利益也

これは僧良弁が逆修塔として造立したもので、造立日を「八月時正」とする。時正は春秋ともに彼岸の中日を指す。わざわざ彼岸中日と刻んだ例もあるように、彼岸七日間を時正とする場合もある。逆修石塔の造立日については、それぞれに事情があるにちがいないが、彼岸中に造立することが最も多いのは当然であろう。

広島県福山市鞆町後地の安国寺地藏堂内に安置する地藏菩薩坐像石仏は、丁重な蓮座を備え、総高一九二センチ、舟形光背の背面に八行の刻銘が見られる。理解しやすいように読み下して掲げよう。

慈父の恩の高きことは山王の如く、悲母の恩の深きことは大海の如し。我もし世に一劫を住むとも、悲母の恩を説いて尽すことを能わず。

（心地観經三の經文）

右意趣は、沙弥円乗ならびに比丘尼妙蓮、逆修善根のため、この地藏菩薩、これを造立する所也。

元徳二年<sup>庚</sup>  
午卯月廿日

願主藤原貞氏

鎌倉末期元徳二年（一一三〇）に、藤原貞氏が父の沙弥円乗と、母の比丘尼妙蓮の福寿を祈って、この両親のために逆修法事を修し、この地藏石仏を供養仏として造立したのである。健在の親のために逆修塔を造った例は先にもあった。この藤原貞氏父子はこの付近の富裕層の人であったにちがいない。

平安後期に貴族の間に行なわれた逆修の個人的法事は、鎌倉時代に入ると、これにならおうとする上級武士層や富裕層へと普及し、彼らは貴族の大規模な法事よりも逆修の内容を学ぶことに重点を置き、その代りに前代に見なかった逆修法事のあかしというべき供養塔などを、後世にまで残したのである。庶民もまた大衆的逆修の行なわれる時には参加したことは、逆修名帳や、一百余人逆修などによって知られる。しかし逆修石塔などの例はまだ多くない。

## 五、南北朝時代の逆修塔の増加

ついで南北朝時代における動向を見てみよう。

京都市東山区鳥部山の実報寺歴代墓地の中央に、高さ四メートルばかりの題目笠塔婆が立っている。この寺は日蓮宗要法寺の廟所で、この大きい笠塔婆の塔身の正面、「南無妙法蓮華經」の大字の下方両脇に「右為日尊逆修」「康永二癸未六月」と刻まれている。

日尊は要法寺の開山で、この笠塔婆は南北朝時代のはじめ康永二年（一三四三）に、日尊の逆修塔として造立され、それが翌々年に示寂したあと、墓塔となったのである。将来墓塔とするために、生前に立てられる塔を「寿塔」と称する。そうした例はもちろん他にもある。

山形県酒田市生石の延命寺にある数基の板碑の内、興国七年（一三四六）の高さ九四センチの自然石板碑は、陰刻線で左右二区に分ち、次のように二つの役目を果させている。

右志者為沙弥善阿逆修

キリク  
（弥陀）

仰願拾有為妄執等證無

為真理月

逆修信仰の史的研究

右志者為氏女七分全得

バイ

願依修善等龍女之

(藥師)

作仏矣

興國七年仲夏仲旬施主  
敬白

沙弥善阿と妻(氏女)が造立した逆修板碑だが、逆修と対照的に「七分全得」の文字が用いられている。七分全得を銘文に書き入れたのは、南北朝時代はじめの頃から多く見られるようになる。

群馬県伊勢崎市昭和町の赤城神社境内に存する二基の大きい石塔の内、高さ二〇二センチの宝塔は、基礎三面にわたって長文の銘文を刻む。第一面の願文の中ほどに

故に一結の諸衆、大蘇の行儀を伝え、……十如実相の妙文を書し、石塔の宝室に安んじ、逆修の修善に備うる処也(原漢文)

とするように、一結の人たちが、法華經を書写してこの石塔内に納め、逆修を修したのである。第二面に共行人数として十人の和尚などの名を刻み、第三面に諸檀施主として、在俗の人たち二十八人の名をつらねる。観応二年(一三五二)十一月のことである。農村の名主層の人たちと和尚たちが共同して、この逆修供養塔を建立したものと思われる。

鳥取県日野郡日南町印賀の経塚原の塔の山に立つ宝篋印塔は、高さ二三六センチ、その基礎に

逆修一日□□妙典

十三部供養已畢

正平十二丁酉十月日

一結衆二百餘□敬白

の刻銘があって、正平十二年(一三五七)に二百余の多くの人が結衆して逆修を営んだのである。この一結衆には庶民も当然参加していることが考えられる。

徳島市寺町の浄智寺と還国寺に、高さ一八三センチの同形式の板碑が各一基ある。もと一組のものであって、仏像と仏名がちがうだけで、銘

文は同じである。一つは

右為七年忌逆修也

南無聖觀世音菩薩

内藤入道行心比丘尼如心

貞治六年丁未二月時正日

他の一つは「南無十一面觀世音菩薩」とする。これらは行心と如心の夫妻が自身の逆修を修し、七年忌相当の時が、この貞治六年（一三六七）春の彼岸中日で、この板碑を供養塔として造立したのである。

千葉県香取郡下総町大菅の檀林寺に数基ある板碑のうち、高さ七〇七センチではば方形に近い自然石面を左右二区に分ち、それぞれに弥陀三尊の種字をあらわし、次の刻銘を持つものがある。

右志趣者為慈父聖靈十三ヶ年也

（弥陀三尊種字） 応安六年 癸丑

光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨

（弥陀三尊種字） 卯月八日 孝子（欠）

右志趣者為悲母逆修善根（欠）

応安六年（一三七三）に孝子某が、一つは亡父十三年のために、一つは現在する母の逆修のために供養するものである。親に仕える子の普通名詞として孝子が使われた。子が親の逆修を修する時、両親健在の場合と片親のみの場合があり、片親の時に死者の菩提と、生存者の逆修を同時にすることもあったのである。

神奈川県鎌倉市極楽寺切通しの北側、民家裏の西方寺跡に数基ならぶ古石塔の内、向って左から二番目の宝篋印塔は、相輪上半を失って高さ一四四センチ、関東式のまとまった形式を示し、基礎側面の二区にわたって、各五行の刻銘がある。

右志趣者奉為房州「禅閻道合逆修作善」宝篋印石塔一基所「令造立也依此善根」致現世寿命長遠」

願主證得菩提乃至「法界平等利益仍逆修」作善所願如件「永和五年己未五月十三日」善女敬白」

逆修信仰の史的研究

上杉安房守憲方、剃髪して道合と称し応永元年（一三九四）十月二十四日に卒した。この石塔は銘文の終りに「善女」とある人が願主となつて、道合の逆修作善を行ない、彼の寿命長遠を祈り、願主自身も未来の菩提の証得を念じているのである。願主の善女が道合の妻であるとする見解に従うべきであろう。妻が夫のために逆修供養塔を造立したという形式をとっているが、この場合に逆修法事の対象は夫の道合だけではなく、夫妻ともの逆修とするのが妥当であろう。「善女」が一步へりくだっているところが奥ゆかしい。

逆修のことを豫修ともいうが、石塔などの刻銘の中に、その文字がいつごろから使用されているか。群馬県新田郡尾島町世良田の長楽寺に存する宝篋印塔基礎に、豫修造立「沙門礼□」至徳三<sup>丙</sup>「六月晦日」とあるのが目にとまっているが、これは南北朝も末期の至徳三年（一三八六）であるし、また他にも多くは見かけない。逆修とするのが圧倒的である。

京都市北区紫野蓮台野町西向寺の地藏画像板碑は、高さ一九〇センチ、画像の下方に次の刻銘がある。

右意趣者为一結衆三十五人□

一結衆三十五人各敬白

明徳二年三月廿八日

逆修善根現世安穩後生善□

南北朝時代末の明徳二年（一三九一）に、三十五人が結衆して逆修を行なったものである。この頃にこうした事例が多くある。

鎌倉市浄明寺の浄妙寺墓地にある明徳三年（一三九二）在銘の宝篋印塔は、基礎側面三方の六区に次のような刻銘がある。

奉造立「宝篋印」塔「一基」

右志趣者「豫現当」来□報「逆修滅」

後善根「御願一□」靈地□□

現無遍「罪滅悉」陰□□□□□□

種智都「也」明徳三「□壬申」

二月廿四日「豫修一」結講□□



これも文の終りにあるように、豫修のための一結講衆が、逆修供養塔として造立したもので、こうした逆修を修する信仰団体が、各地に結成されていたことが推定される。

以上に南北朝時代の逆修塔などの内容の注意すべきものを一応挙げた。この時代全体としては、逆修塔の造立は鎌倉時代に比べて、ずいぶん増加している。武士層や名主層はもちろんであるが、名前は出ないにしても一結衆何十人といった人たちによる逆修も数多くなっている。

## 六、室町・桃山時代の逆修の盛行

逆修信仰の進展を見きわめたために、南北朝時代以前に紙数を費したので、あとは大急ぎに要約するの他なくなった。

室町時代に入ると各地の逆修石塔や板碑などの数は、前とは比較にならぬほど多くなる。しかも、その石塔は皆形が小さく貧弱になって行く。やや大きいものは大勢の参加によって造立されるものだが、今までのように一結衆と書くだけでは、人々は承知しなくなり、一人一人の名をずらりと連名するようになる。これが近世的な傾向である。

いま一つは南北朝末ごろから段々流行して行く十三仏の信仰や、月待信仰・念仏信仰と逆修が結びついたことも、室町・桃山時代の逆修の盛行の原因である。そうしたことを中心に、この時代を通覧してみよう。

千葉県成田市の成田山新勝寺奥の院入口、光明堂の裏の崖にはめこまれている板碑の内、向って右方にある高さ一五七センチの長方形の板碑は、立派な蓮台上に弥陀の種字をあらわし、その下から左右にわたって、念の入った銘文を刻む。

右志趣者為逆修善根契約人々等建立

明德五年<sup>甲戌</sup>

キリーク（弥陀の種字）  
施主等<sup>敬白</sup>

八月彼岸

自性之石塔欲領七分全得功德乃至法界平等利益

室町初頭の明德五年（一三九四）の造立で、一結衆といわず「契約の人々等」とあり、「七分全得の功德を領せんと欲す」などの文が目立

逆修信仰の史的研究

## 逆修信仰の史的研究

つ。七分全得の文字は室町時代には盛んに使われる。

兵庫県神崎郡市川町塩谷にある堂谷十三仏自然石板碑群は、十三仏を各別に高さ一メートルほどの板碑に作ったもので、応永二十年（一四一三）と二十一年にわたって、常念という人が自身の逆修のために造立したもので、「（勢至種字）一周忌常念逆修善根」、「（弥陀種字）来三年逆修善根」などとする。このように一周忌の本尊を勢至、三年忌の本尊を弥陀とすることは、十三仏の諸尊のつかさどる年忌・忌日から出ているのである。

滋賀県守山市守山の守善寺の永享六年（一四三四）在銘の宝篋印塔基礎に

「百万遍人講」逆修惣塔」永享六年」四月八日」

と刻まれている。百万遍念仏の講衆で逆修を営んだ供養塔であるが、惣塔とあるのは多数の人々の集りを想像させる。

東京都府中市白糸台一丁目の鹿島芳郎氏蔵の文安五年（一四四八）八月廿三日の「月待逆修人数」とある月待板碑には、右馬次郎、彦八など十余人の名がある。

また東京都練馬区上石神井二丁目の三宝寺に蔵する文明四年（一四七二）七月十五日の来迎弥陀三尊画像板碑には、「夜念仏供養逆修」とし、弥四郎、平太次郎、六郎四郎、八郎三郎、次郎太郎の五人の庶民らしい名が見える。

福井県小浜市門前の明通寺には多数の寄進木札が保存されているが、その一枚の墨書を紹介する。

奉施入 桐山明通寺如法経米事

合拾斛者 但毎年御経一部

右志趣者为明金禅尼逆修大菩提

没一塵仏界擬九品得生惣者普

天群類平等拔済而已

文明十三年 辛丑 七月十三日

願主小浜明金禅尼

室町中期の文明十三年（一四八一）七月、小浜に住む富裕の女性が米十石を明通寺に寄進し、毎年如法經（法華經）一部読誦の料にあてた。これは自身の逆修のためであった。このような逆修もあったのである。

小石塔、小石仏、梵鐘、石燈籠のある所、どこにでも「逆修」の文字を見えるようになって行くのが、この時代であった。実例は際限がないから割愛する。

## 七、結語

逆修を歴史的にたどると、わが国では平安時代中期以来、貴族の仏事として華やかに行なわれたが、一方大衆を対象とする法界衆生逆修のあったことも無視できない。鎌倉時代に入って、貴族の風習にならう武士層や名主層などの富裕階級が、盛大な仏事よりも記念物的な逆修石塔などの造立に熱を加えて行ったが、石塔の造立は死者の追善や法界衆生の平等利益などが中心であった。

南北朝時代に至ると、逆修塔はようやく数を増すが、室町時代になると急に様相が変わって、小石塔、小石仏の増加が庶民の手によって行なわれ、その大部分が自身の逆修のための造立という状態になってくる。民間庶民信仰的な色彩がこくなり、十王信仰、十三仏信仰、月待信仰などと逆修信仰が結ばれて、すべてが逆修に塗りつぶされるような錯覚をさえ抱かされる。

しかし、江戸時代ははじめからおとろえて、寛文ごろまでの実例を私は見ているが、その後はほとんど終息したように思われる。

従って現代の多くの人たちは、私どもの祖先の信仰の歴史の中に、逆修というものが、長い間行なわれていたことを知らない。昔の人が逆修を行なうことが盛んであったことは、寺や僧との結びつきを強いものとし、寺や僧も人々の生活に直結したのである。寺が墓を守るものとなっていたのと、逆修の歴史が終ると、時期を同じうすることは偶然ではないようである。

（完）